

第 2 回富山県経済・文化長期ビジョン懇話会（平成 27 年 12 月 3 日）

吉田泉委員 提出資料

1) 富山県の独特の芸術文化活動の推進体制

芸文協が創立されたとき（43 年前）には、「富山は文化果つる県」であるといわれていた。当時の創立メンバーにとっても今日の富山の芸術文化の隆盛は想像だにできなかった。

今日このように振興を迎えている根本には富山県・マスコミ・芸文協の他県にも例を見ない「三位一体」の盤石の体制がある。

2) 子供に特化された国際フェスティバル

来年開催される「とやま世界こども舞台芸術祭 2016」（PAT 2016）は富山で 4 年に 1 回開かれている国際フェスティバルで、1983 年以来 10 回目となる記念すべき祭典となっている。モナコ、リンゲン（ドイツ）と共に「世界 3 大アマチュア演劇祭」の一角を担っている。

東京を仲介としないこのバイパス型の海外文化交流（芸文協の人脈ネットワークを基本としている交流）は今後もますます促進されていくべきだ。子供やその父兄、また父兄も多く含んだボランティアが一丸となって、富山に居ながらにして海外の子供たちに出会い異文化に触れ、舞台との一体感によって直接の深い感動を受けることの意義は大きい。

3) 伝統芸能や伝統生活文化への力点

20 年、30 年後ますます世界のグローバル化は進んでいるだろうが、そうした世界の均一さがもたらす状況になればなるほど、私たちは各人の差異、個別的なものに注目し惹かれるのではないか。だからこそ伝統芸能や伝統生活文化に対して私たち自身が理解を深め、次代の子供たちに伝えていかねばならない。

芸文協としてもいろいろな側面から活動を手助けしてきているが、少子高齢化の波を受けてこれらに携わる方々の数は減少の一途ではある。しかし富山は稀にみる自然災害の少ない土地柄でもあり、また待望の北陸新幹線の開業も相成り、県外や海外からの流入人口増がますます期待される。そのような環境の大きな変化の中で、多様性を受け入れかつ豊かな人格を持つ子供たちを一人でも多く陶冶していく一助となるのが、私たち芸術文化団体の役割ではなかろうかと考える。